

「桜の渦」

紺谷 充彦

* 登場人物

竹田修一（44）会社員
竹田由紀（39）修一の妻
竹田杏奈（8）修一の娘
医師（42）

* あらすじ

竹田修一は、ごく普通のサラリーマン。札幌市郊外の二戸建ての家に、妻の由紀と娘の杏奈と共に住んでいた。

桜の季節、修一は突如おかしくなる。家の裏にある桜を「一日中、見ていたい」と会社を休んでしまう。由紀は、修一が浮気しているのでは、と疑うが、修一の行動はますます常識を逸脱していく。桜の花びらを茶碗にもって食べようとしたり、窓から裸足で飛び出して桜の木に抱きついたりする。

由紀は、桜が原因だと思い込む。風が強く吹き、花びらが風に乗って渦巻く中、その木を切ろうとする。修一は、それを止めさせようと事情を説明する。健康診断で「肺ガンの疑いあり」と通知され、自分の命と花の命を重ねていた、と打ち明ける。

再検査で「肺ガンではない」と診断され、安心するが、余命一年だったとしても、まだ三十年生きられるとしても、花の命と同じように「一瞬一瞬を懸命に生きなければ」と悟るようになる。

由紀「あなた、もう寝ましょ。消すわよ」

SE スタンドを消す音

修一「なあ、この町は、季節ごとに雪が降るよな」

由紀「へっ？」

修一「冬の雪のほかに、雪虫だろ、ポプラの綿毛が舞うだろ。それに、昨日咲いた桜が、あれが散ったとき、桜吹雪になるよな」

由紀「そうねえ」

修一「今年は、全部の雪が見られるかな」

由紀「あなた、どうしたのよ。ヘンよ。さっきまで頭が痛いって言ってたし。ゴールデンウィークで五日も休みだったから、ボケちゃったんじゃない。明日から仕事でしょ。私も明日は早番だからね。もう寝なきや」

× ×

SE 小鳥の鳴き声

由紀「あなたあ、杏奈あ」

SE 電子レンジのチン

食器を並べる音
ガスコンロをひねる

由紀「あなた、もうそろそろ時間よ。ほら、杏奈も、早く座りなさい」

杏奈「だって。お腹空かないもん」

由紀「ダメよ。ちゃんと朝ご飯食べなきや」

杏奈「えー」

由紀「あなたも、ほら早く、座ってよ。なんでも外ばかり見ているの」

SE 電子レンジを開ける

修一「今日、会社行かない」

由紀「どうしたのよ。熱でもあるの」

修一「いや」

由紀「じゃあ、どうして？」

修一「桜を見ていたんだ」

由紀「えっ？」

修一「この桜、今が一番の見頃だろ、一日中、見ていたんだ」

由紀「だってあなた、今日は休みじゃないでしょ」

SE ヤカンのお湯が沸く

ガスコンロを止める
ポットにお湯を注ぐ

由紀「あなた、バカなこと言っていないで、

本当に遅れるわよ。杏奈、残しちゃダメよ」

杏奈「わたしも、学校行かない」

由紀「なに言っているの、二年生になったばかりでしょ」

杏奈「いやだなあ」

SE 杏奈、イスを引いて立ち上がって、洗面所に行く

由紀「ほら、あなた。テーブル片づかないじやない。食べちゃってよ。私もパートに行

かなきゃならないんだから」

修一「桜、明日が満開かな。明後日からは散

っちゃうだろうな」

SE カップをソーサーに叩き付ける

由紀「勝手にすれば」

× ×

SE 電話の呼び出し音

修一、受話器を取る

修一「はい」

由紀「やっつと、出た。あなた。さっきから何度もかけたのよ。携帯も電源切ってるみたいだし。どこに行ったのよ」

修一「桜を見てたよ」

由紀「うそ。じゃあ、どうして電話にでなかつたの？」

修一「電話より、桜の方が、いいと思ったから、かな」

由紀「そんな、下手な言い訳。あなた、どこかに行ってたんでしょ。最近、どうもヘンだと思ってたのよね。急に、私に優しくし

たり、なんか溜め息ついて、変なこと言ったり

修一「家にいたよ。桜見てたんだ」

由紀「だってあなた、この前、私にお花買ってきたでしょ。もらったときは嬉しかったけど、でも絶対おかしい。いままで買ってくれたことないのに。私の誕生日だって、クリスマスにだってくれたことないでしょ。なのにどうして突然、それも『おまえに、花を贈りたくなつたから』なんて、あなたのキャラじゃないでしょ」

修一「花、気に入らなかったのか？」
由紀「違うわよ」

SE 電話切れる

切れた後の電子音が響く

× ×

SE 玄関のドアを開ける

由紀「だだいまー。あなた、いるの？」

SE 鍵をテーブルに置く
由紀の足音

由紀「あなた(驚きながら)、何しているの？」
修一「桜の花って、食べられるんだよな」
由紀「生の花は食べないのよ。塩漬けにしてなら食べるけど……それより、花びらを茶

碗に、そんなに入れて、杏奈とままごとでもしてたの？」

修一「杏奈は、ピアノだろ。まだだよ。夕飯はさあ、花びらのご飯と、葉っぱのおひたしでも作れないかな。何枚か花びらを食べてみたけど、味はなかったよ」

由紀「ねえ」

修一「この花、落ちてたやつだからな。むしろたわけじゃないぞ」

由紀「あなたあ」

× ×

SE ドライヤーで髪を乾かす音

由紀「二人とも、そんな所で、湯冷めしちゃうわよ。早く窓閉めて」

杏奈「だって、窓閉めたら桜さんが見られなくなっちゃうもん」

由紀「まったく、桜、桜って」

SE ドライヤーを切る
由紀の足音、遠ざかる

修一「杏奈、唄を教えてあげるよ」
杏奈「どんな？」

修一「大正時代、百年ほど前の唄なんだよ」

杏奈「ひやくねん、前？」

修一「♪いのち短し、恋せよ少女(おとめ)……」

BGM (ゴンドラの唄)

修一「杏奈、お父さんが、突然いなくなったらどうする？」

杏奈「分かんない」

修一「悲しむか？」

杏奈「うん」

修一「杏奈とお母さんの二人だけになったら、どうする？」

杏奈「分かんない。だって、お父さん、どこにも行かないでしょ」

SE 桜の枝葉が揺れる音

杏奈「あつ、花びら、窓から入ってきた」

修一「桜さん、杏奈のことが好きだって」

杏奈「でも、お母さんは、この桜さんに毛虫がつくからって、嫌っているよ」

修一「杏奈は、桜さんが好き？」

杏奈「好きよ。ねえ、お父さん、昨日も今日もずっと桜さんを見ているけど。桜さんとお話してできる？」

修一「さすがに、それは無理だね。何を言いたいのかは大体分かるけどね」

杏奈「わたし、話できるよ」
修一「そうかあ」

杏奈「桜さんとお話したんだよ」

修一「なんて言っていた？」

杏奈「これから風が吹くんだって。だから、

もう散っちゃうって」

修一「散っちゃうのか」

杏奈「だって本当だよ」

修一「そうだね」

杏奈「じゃあ、お父さんは？ 桜さん、今、

何て言っている？」

修一「ああ、ちよっと待ってよ。いま聞いて

みるから。静かにしててね」

SE 修一、唇に人差し指をあて「シー」

沈黙

梢が静かに揺れる

修一「ああ、聞こえてきた。こうだよ。『わたくしの命は、これまでです。これから強い風が吹くのです……』」

SE 梢が強く揺れる

桜（女性の声）「……修一さん、わたくしとずっと、ずっと、一緒にいて頂けますか。もう貴方に会えなくなると思うと寂しい。わたくしを愛でて下さい。ずっと、わたくしを愛でて下さい。ああ、風が憎い。わたくしの命を散らす風が憎い。修一さん、わたくしを助けて下さい。風からわたくしを守って下さい。後生ですから」

SE 梢が揺れる音

修一、イスから転げ落ちる

杏奈「お父さん、お父さん」

SE 身体を揺する

杏奈「お母さん、お母さん、お父さんが」

SE 杏奈、階段を駆け上がる

由紀、階段を駆け下りてくる

由紀「あなた。あなた、しっかりして」

修一「ああ」

由紀「大丈夫なの。病院行く？」

修一「病院？ 病院はイヤだ！ 絶対にイヤだからな」

由紀「ハイ、ハイ。分かったわよ。でも、本当はどうなの？ 熱はないみたいだけど」

修一「なんでもない。ちよっと目眩がしただけ」

由紀「ねえ、やっぱり、病院に行きましょう。

あなた、会社で健康診断するって言ってたけど、その結果、どうだったの？ なにか

悪いところあったんじゃないの？ 頭が痛いんでしょ」

修一「うるさいな」

SE 修一、由紀を振り払って立ち上がる

由紀「立てる？」

SE 修一、よろめきながら歩く

ソファーに腰を下ろす

修一「ちよっとソファーで、こうして横になっていけば」

由紀「まったく、強情なんだから。知らないわよ。杏奈、お父さん大丈夫だから、もう

あなた寝なさい」
杏奈「うん。お父さん、おやすみなさい」

SE ドアを閉める音

階段を上がる音

× ×

SE 風が強く吹く
樹木が激しく揺れる。

修一「ああ」

SE 修一、ソファーから身体を起こす

由紀「あなた、大丈夫？ 気分どう？」

SE 強風で窓が揺れる

修一「風か、すごいな」

SE 修一、よろめきながら立ち上がって、

窓に向かう

由紀「何、するの？」

SE カーテンを開ける音

修一「あつ、散らないでくれ」(呟く)

由紀「えっ？」

SE 修一、窓を開けて飛び出す音

由紀「裸足で、あなた」

SE 修一、草むらを踏み分ける音

修一「オレが、オレが押さえてやるからな。

オレが……」

SE 草むらを踏み分ける音

強い風の音

由紀「何なの？ 木に抱きついて」

SE 幹をさする音

修一「散っちゃうじゃないか。オレの命も、

こいつの命も一緒なんだ。もう少しで消え
ちゃう」

SE 風の音

修一「散るな。散るなあ」

由紀「ねえ、どうしちやったのよ」(泣き声)

SE 幹をさする音(頬ずりするように)

修一「散らないでくれ……」

SE 桜が脈打つ音(心臓の鼓動のような)

修一「あつ、聞こえる……聞こえてくる……

桜の本当の声だ……そうか……おまえ……
寂しくないのか」

SE 修一、草むらに倒れ込む音

強い風の音

由紀「あなたあ」(叫ぶ)

× ×

BGM (ゴンドラの唄)

修一「♪朱き唇 褪せぬ間に」(ハミングで)

由紀「あなた、もう眠って。電気消すわよ」

修一「♪熱き血潮の 冷えぬ間に」(ハミン
グで)

由紀「やっぱり、疲れているのよ、あなた。
明日、病院に行きましようね」

修一「♪明日の月日は ないものを」(ハミ
ングで)

由紀「ねえ」

修一「♪いのち短し、恋せよ少女」(ハミン
グで)

由紀「止めて！ その唄……。どうせ私は、
色褪せたわよ」

SE 電気を消す音

× ×

SE 激しい風の音

カーテンを開ける

修一「花びらが……舞い上がって、風と一緒に
なって……渦巻いている」(呟く)

SE 激しい風の音

風が渦巻く音(高音)

修一「あつ、由紀。あいつ、いったい何やっ
てるんだ」(呟く)

SE 窓を開ける

修一「由紀、止める」

由紀「こんな桜があるから」

修一「おい、やめろ」

SE 桜をのこぎりで切る音

修一「切るな！」

SE 修一、階段を駆け降りる

激しい風の音
枝がしなる音
のこぎりを挽く音が響く

修一「止めろ。やめてくれ」

由紀「いやあ」

SE のこぎりを挽く音

草むらを裸足で走る
二人がもみ合って倒れる

修一「聞いてくれ。聞け、オレの話の聞け」

SE 修一、由紀の顔を叩く

修一「明日、病院に行くんだ。再検査なんだ」

SE 激しい息づかい

修一「健康診断の結果が来て、『ガン』を強く
疑う』って書かれていたんだ」

由紀「病院？」

修一「そうだよ。明日、ガンセンターに行く
んだ。再検査にな」

由紀「ガンって？」

修一「肺だよ。レントゲン撮ったら、陰が写
ってた」

由紀「肺ガンなの？」

修一「肺に陰があるんなら、そうだな」

由紀「でも直るんじゃない？」

修一「肺ガンは難しいんだ。脳に転移するこ
とも多いらしい」

SE 激しい風の音

修一「オレ、頭痛がするって言ってたろう。

昨日の目眩も……変な声が聞こえるのも……
……たぶん、脳転移だ。だったら、もう……」

由紀「なんで、話してくれなかったのよ」

修一「おまえに、心配かけたくなかったから
な」

SE 由紀、鼻をすする

修一「寒いな。家に入ろう」

× ×

SE イスのきしむ音

医師「なんともないですね。レントゲンでは、
ここに白い陰が写っていましたが、そうで
すねえ、血管か、何かが、写ったんでしょ
う。血管の角度によっては、こういうたけ
ースもありますからあ」

SE 医師、ペンでモニター画面を叩く

医師「この陰、肺のこの辺りですけど、CT
の画像だと、特に問題ないですからねえ」

修一「頭、痛いんですが……」

医師「とにかく、肺ガンではないですからあ。
まあ、頭痛でしたら、別の専門医の方へ行
って下さい。肺ガンでないことは確かです
からあ」(事務的な口調)

修一「はあ」

SE イスのきしむ音(医師が机に向かう)

× ×

SE 車が過ぎる音

SE 車が過ぎる音

修一「昨日の風で、すっかり葉桜になったな」

由紀「この桜並木、一昨日(おととい)だっ
たらキレイだったでしょうね」

修一「そうだな」

由紀「でも、本当に良かったわ」

修一「ああ」

由紀「頭が痛いって言ってたけど、それはど
うなの？」

修一「あの医者、肺ガンじゃないなら『僕に
は関係ない』って感じでさ、頭痛だったら
そっちの専門医に行けてよ」

由紀「フン。まるで、修理屋ね」

修一「それに、なんか、もう痛くない」
由紀「じゃあ、気のせいだったんでしょ」

SE バイクが通り過ぎる音

修一「オレ、再検査の通知が来てから、ずいぶん悩んでたから。それで頭が痛い気がしてたんだろうな。そしたら、絶対に脳に転移してると思うようになって、それで、脳転移だったら、余命一年ぐらいじゃないかと、勝手に思ってたさあ」

由紀「悪い方へ、悪い方へと考えちゃうのよね。分かる。私もそう」

修一「それで、オレ、思ったんだ」

由紀「何を？」

修一「悔いがないように、したいってな」

SE 涼風が流れる

修一「杏奈やおまえと、一瞬、一瞬を大切に過ごして、今やっている仕事をキチンと仕上げて。もし、余命一年って、今日宣告されたら、そうやってこれから毎日過ごそうって、そう思ってたんだ」

由紀「だから……お花を……」

SE 車が過ぎ去る音

自転車がベルを鳴らしながら来る

修一「おお、後から来てるぞ」

SE 修一、由紀の肩を軽く叩いて引き寄せる
自転車が過ぎていく

SE 葉桜が、優しく揺れる

修一「おまえ、白髪増えたなあ」

由紀「何言ってるの。しかたないでしょ。髪だって、唇だって。しょうがないじゃない」
修一「そうだな」

由紀「私ももうすぐ四十よ。人生の半分以上は過ぎたわ。心も色褪せるわよ。でも、これから、あと三十年か四十年、生きられるかしらね。少なくとも、杏奈が大人になるまで頑張らなきゃね」

SE 葉桜が、涼風になびいて、うなづくように揺れる

修一「あと一年だって、三十年だって、花の

三日の命だって、結局同じことなんだな」

由紀「そうかもね」

SE 葉桜が、優しく揺れる

(Σ)